

式 辞

松葉双葉にいよいよ緑なし、梅花紅白に競いて小鳥遊ぶ。竹林はしなやかなるをもって白き風を起し、真高名物、摩天の大櫓は盛んに春の木霊を発す。

まことに、万物の命爽やかなる今日の良き日に、同窓会副会長、会長代行 佐藤 務様、PTA全日制会長 大塚 和幸 様、同定時制会長 塚田 嘉代子（かよこ）様をはじめ、多くの御来賓の皆様の御臨席を得て、真岡高等学校、平成28年度卒業式を挙げていきますことは、職員、生徒一同、大きな喜びとするところであります。

また、保護者の皆様には、お子様の晴れの姿に新たな感慨をお持ちのことと思います。3年間の本校教育活動への深いご理解と御支援にあたためて感謝申し上げるとともに、本日、卒業式にあたって心よりお祝いを申し上げます。

式辞に際して、私が大事にしている句を紹介します。

「悠然として山を見る蛙（かはず）かな」

人間を愛し自然の森羅万象に慈しみの目を向け、この国の風土に愛着を持ち続けた、小林一茶が残した言葉です。蛙も人間も大きな地球や無限の宇宙の前では、同じくらいに小さな存在です。しかし、この句を読むとき、大きな山を比べようもない小さな蛙が、「悠然と」「見る」ことによって、小さな蛙の存在が大きなものとして我々の中に入ってきます。蛙は自分の小ささを十分に分かっていながら山の大きさに向かい合い、ひるむことなく確かな自分の存在を主張しているように見えます。ために、蛙も山と同じ存在の大きさを主張することとなります。山は、我々にとっては世界、つまりこの地球の上で多様な人間が多様な方向性を持って休みなく動き回る社会であり、蛙は、その中であって個々の人生と向かい合い立ち向かって行く我々自身ともいえます。時々、思い返しては我が身を励ます言葉として、この句は私の中にあります。

「悠然として山をみる蛙（かはず）かな」

卒業生諸君、晴れの卒業おめでとう。式辞を考える際に、私は、今日、諸君がどんな顔をして、どんな態度で入場するのかを想像しました。今、その姿を目の当たりにして、想像した以上に晴れやかな表情、堂々とした歩みであることに、校長として大きな誇りを感じています。3年前の諸君の入学式、一人一人が呼名されたその返事は、「スポーツでいえば選手宣誓である」と訓示したことを、昨日のことように思い出します。あっという間の時間であったでしょう。しかし、この3年間、あるいは定時制の諸君にとっての4年間は、今後の生涯のなかで確かな意味を持った時間となるはずです。今日の返事は、諸君がこれからの人生に向かっていくための、自分に向けたエールであります。

さて、諸君が入学したその年に、全国を見渡しても有数の大きさ、重さを持つ大応援団旗を作製しました。私はこれに、「白竜千里旗」と名づけました。「白竜」とは、白布ヶ丘に学ぶ生徒一人一人を、生きる力に溢れた竜に見立てものであり、この竜たちは、千里の彼方、高みにまで飛翔せよ、という願いを込めた命名でありました。

これから諸君が飛び立つその社会は、これまでのどんな時代にもなかった変化が加速することとなります。我が国では人口減少と世代のアンバランス化が進む一方、地球規模で

は毎年約7千万人の人口増が予想され、40年後には100億人を突破するとの予測もあります。目に見えない変化として、毎日およそ20万人の人口が増えていったとき、地球が命を育むキャパシティーは失われるかもしれません。また、最近、急速に進化を遂げている人工知能が人間の生活にどんな影響を与えるのかも不透明であります。一説に依れば、20年後には、現在ある人間の仕事のほとんどが機械によって代行されるとも言われます。また、知識なり方法なり、あるいは伝統的なもの、今ある価値観や慣習などは、時代の変化に晒されて、これまでにない速いスピードで淘汰が進んでいます。まことに、先が見えにくい不透明な時代を我々は生きていくことになりそうです。

しかし、社会がどう変わろうと、時代がどんなに不透明になろうとも、忘れてならないのは、生物としての人間の根っこの部分にあって人間を作るのは、血と汗と涙であるということです。血とは情(なさけ)と情熱であり、汗とは丈夫な体と筋肉の痛みであり、そして涙とは喜びと悲しみであります。また、社会的な存在としての人間の根っこになればならないのは、思いやりと勇気と正義感であると私は考えます。人は生きる上で、個人的な存在としての自己があり、同時に社会的な存在として自己がある、という事実を忘れてはなりません。

こういう人としての在り方を踏まえた上で、時代や社会の変化を十分に自分のものとすることが、これからの諸君の人生を豊かにし、社会を前に進めることになります。変化とか不透明といった言葉は、人を不安にさせるものですが、積極的な見方をすれば、力のある者にとってはそういう時代だからこそ、人として生きる可能性は、一層ダイナミックなものとなっていくとも言えます。必要な力は、学ぶ力です。進学、就職を問わず、学び続けることが、変化への対応力の源となります。その学びは、先人が形を整えた知識や方法を身に付けることが中心であったこれまでの学びを基礎として、具体的な行動や新たな創造に関わっていく、より主体的な学びが求められることとなります。何のために何をどう学んでどんな力を身に付けるのか、ということをご自ら考え自ら向かっていく学びです。生涯にわたる学びとなることでしょう。何もないところに道を付けていくような困難を伴うものですが、学び続けて乗り越える力が強くなるにつれ、新しくなった自分を発見し、見える人生の風景も変わっていくはずです。教室には「自らを主とせよ」の文言を掲示してありますが、これからの諸君にとって、まさにこのことが一大事となっていくわけです。

本校生が合い言葉とするのは、「至誠」「質実剛健」「文武両道」、そして「突破力」。あらためて心に刻み、諸君の生きる力、志の糧となることを期待して止みません。何より、今後も自らの可能性を大いに鍛え、竜が千里を自在に飛ぶが如く、人が生きるそのダイナミズムを存分に味わえる人とならんことを心より願います。

私は今、素晴らしい卒業生を前にしていることに、この上ない誇りを感じています。諸君の新たな出発へのはなむけとして、郷土が生んだ文豪、山本有三の「路傍の石」より、毎年卒業生に贈ってきた言葉を、今年もまたエールとしながら式辞を閉じます。

「たった一人しかいない自分を、たった一度きりの人生を、本当に生きなかったら人間に生まれてきた甲斐がないじゃないか。」

強く、逞しく、大らかに！

平成29年3月1日 栃木県立真岡高等学校長 菊地 透